高知県立坂本龍馬記念館だより 2017（平成29）年1月 第100号

高知県立坂本龍馬記念館 The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛騰

ひとう

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

新春 SHINSYUN TAIKEI 大慶

あけましておめでとうございます

特別寄稿「飛騰」100号に寄せて

高知県知事
尾﨑 正直

「龍馬を通して 高知の魅力を」

高知県立坂本龍馬記念館は、龍馬生誕150周年を契機に多くの県民有志の熱心な活動により平成3年に開館し、桂浜に立つ龍馬像とともに、県内外から多くの龍馬ファンが訪れる施設となり、また県民の皆様にとりましても、特別な存在となっております。この坂本龍馬記念館が発行している「飛騰」が、記念すべき第100号を迎えましたことをたいへん嬉しく思います。

現在、坂本龍馬記念館は、平成26年7月に策定しました「坂本龍馬記念館リニューアル基本構想」に基づき、本物の資料を収蔵・展示できる〝博物館としての機能〟を備え、かつ、太平洋を眺望できる立地条件を活かした魅力ある〝観光文化施設〟を目指して、新館の建築と既存館の改修を進めているところであります。新館の建築工事は、昨年10月から開始しておりますが、本年4月からは既存館についても、改修工事に取りかかることとしております。新館では「龍馬と〝心通わす〟」をテーマに実物の資料を通して龍馬を「深く伝える」展示を、既存館では「龍馬と〝遊ぶ〟」をテーマに親しみやすい演出や体験を通して龍馬を「広く伝える」展示を考えており、平成30年春には、龍馬の功績や人柄を深く存分に体感できる魅力的な施設として、リニューアルオープンし、皆様方をお迎えすることとなります。

今年は大政奉還から150年、坂本龍馬記念館がリニューアルオープンを迎える平成30年は明治維新から150年にあたる記念の年であります。高知県ではこの2年間を幕末維新に大きな役割を果たした「土佐」を全国に発信する大きなチャンスと捉え、歴史を中心とした博覧会「志国高知 幕末維新博」を開催することとしております。

本年3月4日に開幕を迎えるこの「志国高知 幕末維新博」では、リニューアルオープンを迎える坂本龍馬記念館と新たに開館する高知城歴史博物館をメイン会場とし、大政奉還から明治維新へと続く激動のうねりの中、坂本龍馬をはじめ、薩長同盟に奔走した中岡慎太郎、大政奉還を建白した土佐藩主・山内容堂や参政・後藤象二郎など多くの土佐の偉人に関する展覧会を開催することとしております。

とりわけ、坂本龍馬記念館においては、龍馬の生き様を伺い知ることのできる貴重な手紙をはじめ、幕末維新の息吹を感じる様々な資料を紹介する特別展の開催を予定しており、全国の龍馬ファンをはじめ多くの皆様に、龍馬を通して高知の魅力を伝えるメイン会場としての役割を大いに期待するところであります。

平成30年春には、一層魅力ある施設となった坂本龍馬記念館へ、ぜひ多くの方々にご来館いただき、龍馬や幕末維新史をはじめとする土佐の歴史文化に触れていただきたいと考えております。あわせて、リニューアルオープンの際には「志国高知 幕末維新博」を一層盛り上げてまいりますので、皆様のご協力とご支援をよろしくお願いします。

特別寄稿「飛騰」100号に寄せて

全国龍馬社中会長
橋本 邦健

「多くの期待に応えて」

飛騰100号、発行おめでとうございます。継続することは大変な労力を必要としますが、坂本龍馬記念館と共に前進前進で号を重ね、今日までご苦労様でした。これもひもとけば館の歩みがつぶさに理解出来、大変貴重な資料となり我々読者にとってありがたく、感謝するところです。

当初は色彩感も少なく、報告書のようであったように思います。しかし、昨今ではカラーとなり見易く、また各方面からの情報も豊富で内容も充実して来ており、楽しく読ませて頂いております。多くの皆々様にも愛読されている所以と思います。今ではページ数も不足ぎみでないかと推察しています。

今後、立派な新館が2018年、そして既存館もリニューアルされて同時にオープンとお聞きしております。特に新館は博物館法に準じたものであるとのことです。

1984年（昭和59年）、高知に坂本龍馬記念館がないのはおかしいと言う意見があり、12団体（約1，300人）の青年が記念館建立の運動を興し、足掛け8年をかけ目標額10億円の浄財を募り、その甲斐あって建立することが出来て、1991年（平成3年）高知県に寄贈させて頂きました。そして同年坂本龍馬の誕生日の11月15日にめでたくオープンしました。残念ながら我々の努力不足で国宝及びそれに準ずる物品の展示に供するものに至らなかった。このことが我々の心に残る一点でした。それがこの度、高知県の英知によって建立できることは、記念館建立の運動に携わった者として大変感銘を受けるところであります。

そのことによって、京都国立博物館、下関市立歴史博物館（旧長府博物館）等に保存されている龍馬に関する書画及び遺品等、また西郷隆盛・勝海舟等のものなど直接拝観可能となり、龍馬ファンは申す迄もなく多くの人々の期待にそうことになると思われます。

坂本龍馬記念館は一段とその評価も高く、重厚さを増すことになります。そこで、飛騰もより重要な意味を持つこととなります。そして、多くの期待を抱かれることは必至です。

全国龍馬社中も当然ながらご協力を厭うものではありません。何かとご示唆下さい。一致協力して全国の皆々様にご満足して頂ける、よりよい「飛騰」にして参りましょう。

坂本龍馬記念館運営協議会会長
高知新聞社学芸部副部長
竹内　一

「僕のリョウマ」

いまさら司馬遼太郎『竜馬がゆく』を再読しているのは、ある仕事の必要に迫られてのことだが、やはり抜群に面白い長編小説である。あらためて感じながら読み進めている。

そんなときにこんなメールがあった。

〈『土左日記』が『土佐日記』でないように「竜馬」は「龍馬」ではないのでは？〉

紀貫之が土佐から京都までの55日間の旅を記した『土左日記』は虚構を交えた文学作品である。それがゆえに「土佐」ではなく「土左」としているという説がある。つまり司馬の「竜馬」も、それと同じではないか、という推理だ。

このことに関しては坂本龍馬記念館のホームページに極めて明確な回答が掲載されていた。

〈「龍馬」と「竜馬」についてですが、龍馬自身は「竜」の字は一度も使ったことがありませんので、当館では「竜馬」という表記は絶対しないようにしています。〈中略〉「竜馬」が一般的になったのはやはり、司馬遼太郎氏が書いた『竜馬がゆく』の影響だと思います。司馬氏は「小説の中では僕のリョウマを動かすのだから竜馬にした」と語っておられたそうで、実在した龍馬と架空の竜馬を漢字によって区別したそうです〉

知人の推理はどんぴしゃりだ。〈当館では「竜馬」という表記を絶対にしない〉という屹然とした姿勢も好感が持てる。

さて、その「僕のリョウマ」のほうである。いったい司馬遼太郎は「竜馬」に何を託したのか。

それは「日本における近代資本主義の活き活きとした黎明期を駆け抜けた青年」ではないだろうか。

剣術修行で江戸にいた「竜馬」は黒船を目の当たりにする。それは近代資本主義との対面でもあった。黒船は江戸湾に入り、品川沖で艦載砲を打ち放った。司馬は書く。

〈この品川沖の数発の砲声ほど、日本歴史を変えたものはない〉

土佐藩は品川に屋敷を有していた。砲撃を受けて司馬の「竜馬」は走る。

〈竜馬は、品川陣屋へ飛ぶように駆けた。というより、坂本竜馬は、このときから、自分の人生にむかって飛ぶように駆けはじめたといったほうが当たっているだろう〉

やがて「竜馬」は「攘夷」と距離をおく。近代資本主義国家にグローバリズムは欠かせない歯車である。「剣術」や「藩」といったことよりも、大切なものは「日本の黒船」だった。

龍馬没後百五十年、いま資本主義は大きな岐路を迎えている。常に資本主義は経済成長によって、その健全性を保ってきた。今日より明日、今年より来年、生活は良くなっていく。収入は増えていくはず。企業も設備投資をためらわない。だから人々はさらなる多忙も我慢する。

その歯車に異変があって久しい。もはや大きな経済成長を望めない。みんな生活の自衛に入らざるをえない。マイナス金利を図ったところで、自衛のための貯蓄は消費に回らない。

いまこの時代を「龍馬」が生きていたらどうするのか、という陳腐な結びで終えたくはない。きっと私たちの胸のうちに、それぞれの「僕のリョウマ」がいる。けれどいったい「リョウマ」をどう動かせばいいのだろう？私たちは行き先を見通すことのできない未知の時代を迎えている。理想を共有して「連帯」する「志士」たちも存在し得ない世界で、私たちはそれぞれの道を独りゆくほかない。

シェイクハンド龍馬像の前で

本年もよろしくお願い申しあげます。

龍馬記念館一同

ここは館長の部屋　髙松　清之

飛騰第100号を迎えて

節目となる第100号の発刊を前に、記念館と飛騰の来し方を振り返ってみようと創刊号から最新号までを斜め読みしてみた。

記念館は博物館や資料館の枠を超えて、様々な展示を通じて龍馬の足跡を辿り、龍馬の精神を感じることのできる「場」となることをコンセプトとしているが、創刊号では、初代館長の小椋さんが、本誌も単なる館からの「便り」ではなく、龍馬の足跡を辿るうえでの「道しるべ」としての役割を担っていくものであると述べられているのが印象深い。

記念館は、開館以来25年の間に、多くの方々の手で育まれ、成長してきた。

開館当初には、これは多分に当館に対する期待の裏返しでもあったと思うが、展示物の少なさを指摘する声が多く寄せられたようである。その後、皆様からの貴重な資料の寄贈や寄託をいただきながら、徐々に展示内容も充実してきた。ただ、そんな中でも、依然として、本物が少なくてがっかりとの声が少なくないというのが現状ではあるが・・・。

そうした声に対しては、記念館は、過去を偲ぶことのできる「物」の充実だけでなく、調査研究やイベントの実施などにより龍馬の業績や精神を広く知っていただくことで、未来への夢や希望を語り合う「場」として育っていきたいとの職員の力強い表明も見ることができる。

また、誌面では都度々々の企画展の案内も行ってきたが、展示の「ねらい」を解説する際には、数少ない所蔵資料をフルに活用しながら、毎回様々な視点から龍馬や彼と同じ時代を生きた英傑達の活躍や志にアプローチしていった学芸員をはじめとする職員の創意工夫と苦労を垣間見ることができた。

まさに飛騰は、開館以来小椋館長や森館長をはじめ多くの職員が、龍馬と取っ組み合った歴史を綴った記録であるとも言える。

飛騰には、全国から足を運んでいただいた来館者の皆様に、観覧後の感想や龍馬への思いなどを綴っていただいたお手紙の中から、いくつかをピックアップして紹介する「拝啓 龍馬殿」というコーナーがあるが、創刊号での10通をスタートに、既に1,000通を大きく超えて紹介を続ける長寿企画となっている。

お手紙の内容は多岐にわたっているが、中には、県外にお住まいにもかかわらず、10回以上の来館を誇る方をはじめ、数多くのヘビーなリピーターがいらっしゃることが読み取られ、改めて感謝の念を深くするところである。

また、受験や結婚、転職や定年退職といった人生の節目を前にして来館される方も多く、それぞれ希望に胸を膨らませて、あるいは、悩んだり、迷ったり、苦しんだりする中で、その後の生き方や目標のあり方を自問自答し、そして龍馬に問いかけながら、進むべき方向を見出し、決心できたといったことを記す方も少なくない。このことは、龍馬の精神を現代に生かすべく館の運営に携わる私たちにとっては、何にも増して、明日に向かっての意欲と勇気を与えていただくものとなっている。

WEBを通じた情報発信が主流となった現在において、機関誌「飛騰」が今後どのような役割を果たしていくのか。平成30年春の新館を加えた2館体制を睨んで今一度検討すべき大事なテーマの一つである。

勢ぞろいした「飛騰」(1～99号)

新春紙面座談会

龍馬没後150年、各地で龍馬を紹介

巡回展「土佐から来たぜよ！坂本龍馬展」

担当者たちが熱い思いを語る

龍馬没後150年の年が明けました。当館は4月から休館に入りますが、館所蔵資料を持って初めての県外巡回展を実施します。県外四会場の担当の皆様方のご協力の下、一昨年から続く開催準備も大詰めです。

いよいよ今月、岡山を皮切りに〝龍馬〟が土佐から出かけます。新しい年を前に、開催各地の担当者にその意気込みをお聞きしました。

参加者（開催順、敬称略）

*岡山・林原美術館 学芸員
橋本 龍

*熊本県立美術館 学芸課主幹
有木 芳隆

*東京・目黒雅叙園 マーケティング部グループマネージャー
川中 博史

*広島県立歴史博物館 主任学芸員
岡野 将士

コーディネーター　記念館学芸課長 前田 由紀枝

―― さあいよいよ、土佐から〝龍馬〟が皆様たちのところに出かけるときが近づいてきました。記念館も初めての試みでドキドキしていますが、担当の皆様の意気込みはいかがでしょうか。

橋本龍・岡山　当館の平成29年の最初を飾る展覧会であるとともに、巡回展の初回でもあります。準備の時間も限られていますが、高知の英雄であり、日本のヒーローである龍馬の魅力的な人柄と偉大な業績を岡山のお客様にお伝えできればと思います。

有木芳隆・熊本　熊本の地で坂本龍馬を取り上げる展覧会は、初めてです。坂本龍馬記念館ご所蔵の龍馬の手紙や資料を中心に、熊本の方々に（あまりにも有名ではありますが）龍馬の生涯、人となり、その業績を知っていただく絶好の機会と考えています。併せて、幕末熊本藩の儒者で経世家の横井小楠（1809～1869）の新出書簡などを展示いたします。幕末の二人の偉人の事績を同時に御覧いただけるまたとない機会です。

川中博史・東京　今年は龍馬没後と大政奉還から150年という節目で幕末に注目が集まる年だと思っています。龍馬が残した書簡や展示品を通じてそんな時代の変革期に思いを寄せる展示ができればと思っています。

岡野将士・広島　歴史上最も有名な人物の一人である坂本龍馬について、一括した資料で紹介できることを楽しみにしています。また、当館のある広島県福山市は、いろは丸事件で龍馬が滞在した場所である鞆の浦もあり、龍馬ゆかりの地です。また、龍馬記念館をはじめ他館の方々と共同の調査等を経て、開催できることはとても新鮮な体験でもあり、新たな繋がりを生んでくれています。

―― 口調は様々ですが、各地で楽しみにしてくださっていることが伝わってきました。うれしいですね。今回の「龍馬展」開催をお受けくださったきっかけは何でしょうか。また、各地での坂本龍馬の評価はいかがなものでしょうか。

橋本　以前特別展を共同で行ったテレビせとうちさんからお話をいただきました。当館は基本的に館蔵品を中心として展覧会を行ってきたので、他館より大規模に資料を借用して展示することが少なく、また「坂本龍馬」を岡山の皆さんにご紹介させていただけるので、開催を決めました。

有木　龍馬が高い人気を誇っているのは熊本も同じです。開催のきっかけは、坂本龍馬記念館の（故）森前館長が、長い交流のあった熊本日日新聞社にその熱い想いを伝えられたことに始まると伺っています。その想いを継げるかたちで今回の展覧会開催の運びとなりました。またとない機会ですので、一人でも多くの熊本県民にご覧いただきたいと願います。

川中　2010年末に「坂本龍馬×百段階段」を目黒雅叙園で開催しました。何よりも森前館長とソフトバンクグループ孫社長の友情という強い絆があったことです。江戸（東京）は、桂小五郎や龍馬が剣術修行に励んでいた地です。龍馬が修行中にペリーが来航し、大騒ぎになっている江戸の様子を直接肌で感じたことが、恐らく龍馬が目覚めるきっかけの一つとなったであろうと想像しています。

岡野　福山にはいろは丸事件に関連する鞆の浦があり、坂本龍馬は非常に近しい存在であることや、人と人の縁により開催することとなりました。ここ福山の鞆の浦では、いろは丸記念館や龍馬の隠れ家である枡屋邸、七卿落ちの史跡、平成いろは丸の就航等の幕末に関わる足跡が残され、多くの観光客が訪れています。

―― 龍馬と各地とのつながりも面白いですね。

企画展は大変な作業の連続です。皆様のご苦労もあるはず。私たちもずいぶん皆様に助けられています。大変だからこその醍醐味もあると思いますが。

橋本　限られた時間の中での準備が、やはり大変です。しかし、龍馬の手紙などを読みながら、龍馬の生きた時代を追体験させていただいています。龍馬が得意な時には楽しく、最後暗殺されるときには暗澹とした気持ちになります。こうしたことをお客様にお伝えできるようがんばっています。

有木　坂本龍馬と横井小楠。ともに展覧会として取り上げるのは初めてです。4月初めの開会を目指して手探りでの準備が続いていますが、坂本龍馬

記念館や、共通開催する林原美術館、広島県立歴史博物館、目黒雅叙園のご協力、ご尽力によって少しずつかたちをなしつつあります。**龍馬と小楠という、両雄の手紙や資料が一堂に並んだ展覧会を楽しみにしています。**

川中　展示会場が有形文化財という、彫刻や日本画他、装飾が施されている特殊な場所なので、部屋の設えと展示品のバランスが難しいときがあります。しかし、またそれが面白い演出を生むことも。**どんな龍馬が飛び出すのかという期待があります。**

岡野　どこの館でも同じだと思いますが、これだけの資料をどのように見せていくのか。ストーリーをどのように組み立てるのかが一番悩ましいのではないでしょうか。来館者が来て良かった。**何か「なるほど」と納得して帰っていただけるような工夫をしなければ**と苦悩しております。

――　各地のご協力なしにはここまで来ることができなかったと改めて感じます。また龍馬を通じた人や地の縁の大切さも。そんな各地、各館の特長や見どころを教えてください。

橋本　当館のコレクションは、二つの柱からできています。一つは林原一郎が個人で蒐集したもので、主として東洋古美術です。もう一つは、岡山藩主池田家が、家宝として伝えてきた大名道具や調度品です。今回の展覧会では記念館から借用する資料のほかに、**幕末から明治維新期の池田家にまつわる錦御旗などの資料を合わせてご覧いただきます。**

有木　熊本県立美術館は熊本城二の丸広場にあります。当館では、旧熊本藩主・細川家の美術品や史料等を継承する公益財団法人永青文庫（東京都）の所蔵品を常時、御覧いただくことができます。当館も、このたびの熊本地震によって収蔵品などに被害を受けましたが、**地震後、1ヶ月余の5月末には再開にこぎ着けました。**平成29年4月8日からの「土佐の龍馬、肥後の小楠」展開催の頃には、熊本城も新緑におおわれています。ぜひ当館と熊本をお訪ねください。

川中　展示会場の東京都指定有形文化財「百段階段」は、**日本画や彩色木彫板や精緻な組子細工、螺鈿細工で装飾された建築物**です。建築材も国産から南米材まで非常に珍しいものが使用されているのが特長です。

目黒は江戸の西郊で江戸時代は目黒不動などがある行楽地でした。もしかしたら、江戸での剣術修行の合間に龍馬も遊山に来ていたかもしれません。ちょうど目黒駅から当園に降りる行人坂が旧東海道の本道でしたので土佐から江戸への道行きには**龍馬も通ったんだろうなと想像しています。**

岡野　当館は、**中世の港町「草戸千軒町遺跡」を中心とした博物館**です。「**民衆生活と交通交易**」を主なテーマとしております。草戸千軒の実物大復元の町並みは当館の見どころです。また、福山駅からすぐの所にあり、全国で最も新幹線の駅に近い博物館でもあります。福山城公園内にあり福山市の文化施設4館と隣接しています。交通交易は龍馬の足跡をたどる時、一つの柱になります。

岡山、熊本、広島の学芸員が合同で行った展示資料の調査風景＝昨年10月、坂本龍馬記念館で

――　本当に各地の会場、趣向も楽しみですね。最後に何でもけっこうです。アピールを！

橋本　個人的なことですが、**坂本龍馬と私の名前（龍）がとても似ており**（足元にも及びませんが）、**担当者として勝手な親近感を感**じております。高知にお邪魔する機会も増え、おいしいかつおのたたきもいただきました。また、熊本、東京、広島の皆さんとご一緒させていただき、**素晴らしいチームワークのもと、展覧会を開催できることがとても楽しみです。**

有木　熊本地震によって熊本城はこれまでにないほどの大きな被害を受けました。熊本の象徴ともいうべき熊本城や阿蘇の復興には長い時間を要するかもしれませんが、必ずやものと姿を取り戻せるものと信じています。**復興の道をたどりつつある熊本の地を、この「土佐の龍馬、肥後の小楠」展をきっかけとして、ぜひお訪ねください。**

川中　東京都指定有形文化財「百段階段」では年間5回ほど、日本文化にちなんだイベントを開催しています。1月20日からは「九州　ひな紀行Ⅱ百段雛まつり」を開催しています。**さまざまな文化をご覧ください。**

岡野　**坂本龍馬は「なぜこれほど人を惹きつけるのか」をこの展示で少しでも考えるきっかけ**になればと思っています。また、当館が巡回の最後の展示となっております。他館の方の御協力も得ながら、**有終の美を飾る展示にしなければ**とプレッシャーも感じておりますが、やってよかった。来て良かったと言っていただける展示にしていきたいと思っています。

――　皆様の思いを聞くほど、いい巡回展になるという気持ちが強くなります。この一年も、龍馬とともにしっかりおつきあいください。ありがとうございました。

土佐から来たぜよ！『坂本龍馬展』（高知県立坂本龍馬記念館）
…… 会場と日程 ……

- **岡山**　**林原美術館**（同美術館・テレビせとうち・山陽新聞社 主催）
  1月20日（金）～3月12日（日）
- **熊本**　**熊本県立美術館**（同美術館・熊本日日新聞社 主催）
  4月8日（土）～5月14日（日）
- **東京**　**目黒雅叙園**（株式会社ソフトバンクグループ主催）
  6月1日（木）～25日（日）
- **広島**　**ふくやま草戸千軒ミュージアム広島県立歴史博物館**（同博物館・中國新聞社 主催）
  7月14日（金）～9月10日（日）

坂本龍馬記念館 25年のあゆみ展

1月7日（土）～3月31日（金）

龍馬記念館は、昨年11月で開館から25年を迎えた。当初は展示するものが少なく、様々な工夫を重ねながら多くの企画展を開催してきた。本年4月から新館建設・既存館リニューアル工事が本格化し、約1年間の休館に入る。そのため、本展が休館前最後の企画展である。

開館以来25年のあゆみを、企画展ポスターや館だより「飛騰」、イベント風景の写真などとともに振り返ります。また、龍馬書簡複製や維新史関連資料、土佐の幕末関連資料など、記念館がこれまで収集に力を入れてきた資料や、記念館ならではという特徴的な収蔵資料を併せて展示します。おかげさまで、収蔵庫建設に伴って資料も充実しており、今まで展示したことがない資料なども公開したいと思っています。

25年間、既存館で開催してきた企画展は、グランドオープン後には新館での開催となります。慣れ親しんだ風景の中で、当館25年のあゆみをじっくり味わっていただけたら幸いです。

前田 由紀枝

「再検証・薩長同盟」展を振り返って

成立から150年を迎えることを契機に企画した「再検証・薩長同盟」展が、まもなく終了する。展示できる資料が少ないなか、今回は準備段階から研究史の整理に多くの時間を割き、図録やパネルに反映した。薩長同盟（盟約）は、幕末政治史における重要なポイントでありながら、特に内容に関してはごく限られた資料しかない。このことが研究を進める上で大きなネックとなってきたが、それでも周辺資料からアプローチをはかることにより、以前に比べればさまざまな事柄が判明している。

今回は展示に関連し、中岡慎太郎館と共同で講演会とバスツアーを企画した。11月26日に高知市立自由民権記念館で開かれた講演会では、薩長盟約に関して最も新しい研究を発表されている大阪経済大学教授の家近良樹氏にお話しいただいた。このなかで同氏は、近年有力視される、盟約は薩摩が長州の政治的復権に協力する目的でなされたものであるとの立場に立ち、少なくとも薩摩にとって、盟約は画期的なものでなかったとの見解を示した。終了後はフロアから質問が相次ぎ、関心の高さが窺われた。

また、11月20日と12月3日に実施した、両館をめぐる展示見学バスツアーでは、各回定員いっぱいの40名あまりが参加した。普段東部へ出かける機会の少ない県西部からの参加者が目立ち、解説に熱心に聞き入っていた。

亀尾 美香

家近教授講演会の様子

学芸員の視点

一圓氏所蔵資料の紹介

主任学芸員　三浦　夏樹

昨年8月末に、元・安芸市立歴史民俗資料館館長の一圓元雅氏所蔵資料を拝見させていただいた。勝海舟や篠崎小竹の書、明治天皇の一代記を描いた絵巻（大正時代の印刷）など大変興味深い資料があった。その中で最も気になった資料は「安政二年　御書付御法令共扣」である。

安政元年（1854）11月5日に南海大地震が起きて、土佐は大きな被害を受けた。本資料は、安政2年の2月から3月に出された書付や法令等の写しであり、当時の世相をよく反映している。ここでは、15代藩主・山内容堂が2月に出した「豊信公（容堂）御自筆之事」の写しを紹介したい。

【資料紹介】（要約）

昨年の大変（地震）は宝永以来の事で、国本は海が溢れ甚大な被害があった。異国船に対する海防を初め、諸事に物入りの時節に、又々莫大な費用が加わる。よって、当年より年限を設けて厳略を行う。災禍に至ったのは、いわゆる自然の成り行きだが、我ら皆、天罰だと思い、きっと奮発し、万一の時の覚悟を持ち、禍転じて福と成すの深慮が肝要である。

一、人選は政治の根本である。

一昨年の改革より、人選については世上がやかましい。現職の者にもし過失があれば喜躍してその罪を責めたり、事実無根の流言を流布させて、退けようとする。これはどういう心底なのか承りたい。いにしえの聖賢といえども小さな疵すら持たない者はいない。積年の旧弊を打破する時には、たとえ小さな疵を持つ者でも、有志の者であればその短所を捨て、長所を取って挙用する。しかし、我らも才無き故に間違うこともあるので、その時は考えを申し述べよ。そのための言路は開いておくので、少しも用捨することはない。君臣と相成る上は、我らの欠けたる部分を縫い合わせるのが臣の道である。

一、士気を養うことは当今の急務である。それについて考えのある者は速やかに承りたい。

（中略）海防についても士気が無い時は、千万の木偶人を備える如し。たとえ砲台を築き、大きな船や武器を設けたとしても、皆無用になる。したがって、士気を養うことは当今の急務である。

一、学問は廃すべからず。無学では大抵、才がある者でも大事を決すことは難しい。我ら不才の上無学にて毎度当惑している故、ますます皆学問をいたすように。それもただ詩文にのみ心を尽くしたり、つまらない技を以て学問と心得れば、たとえ千巻の書を諳んじても無益である。とかく、国家の興廃や政事の得失に目をつけ修行すること。武芸も今までは、互いに我流を主張し、他流を誹謗する。これは砲術が最も甚だしい。これは武の道を理解していないからである。これからは、流儀を選ばず実用に基づき修行すること。以上。

容堂は13代藩主・豊熙、14代藩主・豊惇が急死したことにより、分家の出身ながら、急きょ嘉永元年（1848）に15代藩主となった。藩財政は慢性的に窮乏しており、豊熙が行っていた藩政改革は守旧派の横槍と、藩主の急死で効果がなかった。13代・14代・16代藩主の父である12代豊資が隠居の身で存命であり、容堂は藩主就任当初、遠慮がちに政治をおこなっていた。しかし、嘉永6年（1853）6月のペリー来航と、翌年の安政南海大地震により、もはや豊資や守旧派に遠慮している場合ではなくなった。ペリー来航直後に吉田東洋を起用するが、本資料の条文は、正に容堂と東洋の今後を指し示しているようで面白い。守旧派や門閥派に足を引っ張られながらも二人は改革を推し進める。藩士の士気を上げようと、やる気を削いでいた借上制度（藩士の知行地の借り上げ＝給料カット）を中止した。壊滅的な状況の中、藩を建て直したのは、紛れもなく容堂と東洋である。その容堂の考えがよく分かる本資料は、大変貴重であり、興味深い。

安政２年御書付御法令共控

「浦戸 歴史の風景」(3)

亡魂慰める六体の地蔵

土佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間 一之

桂浜への花海道が大きく左に回って桂浜・浦戸大橋へとのぼっていく。その脇に過去の松原を思い出させる数本の松がある。ここ東南浦から七軒家、戸原、甲殿へと西に伸びる高知海岸には美しい松原があった。慶応3年8月英国外交官アーネスト・サトウは、長崎でのイカルス号水夫殺人事件の犯人を求めて須崎湾に来た。その帰途この松原を、「海岸沿いに生えている帯のような松並木の景色は、私にセイロン島のポアン・ド・ガル湾をまざまざと思い起こさせた」と感嘆の思いをこめて回想録に残している。いまその姿は失われ、人はそこを花海道と呼んでいる。

いま残る数本の松木の根元に6体の地蔵と一領具足の碑が静かにたっている。一領具足、それは長宗我部氏が土佐の統一、そして四国制覇を目指しての軍事力の基礎だった。1600年、関が原の戦いで敗れた長宗我部盛親は国を没収され、徳川方の井伊直政に浦戸城を接収される羽目となった。直政の家臣鈴木平兵衛、松井武太夫らは城受け取りに土佐にきた。一領具足たちは城にこもって「長宗我部氏にせめて土佐の半国、できぬなら一郡でも与えよ」と強硬姿勢で明け渡しを拒否した。雪礫寺の月峰は使者を寺に迎え入れたが、一領具足たちは寺を包囲し交渉は50日に及んだ。月峰は一領具足たちの説得につとめたが、彼らは崩れなかった。結局、桑名弥次兵衛ら家老たちの策略で開城されることとなり、怒った一領具足たちは城門に押し寄せ激戦を展開したが、273人の戦死者を出して潰滅した。首は浦戸に晒されたのち、塩漬けにして大阪へ送られた。胴体は城山の麓に埋められ石丸塚と呼んだ。いま石丸神社がその霊をとむらっている。

六体地蔵

土井晩翠は「忠魂不滅」と題し

此地浦戸ノ古戦場　義は泰山の重きより
鴻毛軽き身を捨てて　主家に殉ずる諸勇士の
斃れし処壮烈の　跡を偲びて後の裔
三百余年過ぎし今日　刻む追慕の記念石
見よ長宗我部いにしえの　一領具足の香を留む
誉は千秋　嗚呼朽ちじ

と詩って詩碑とした。

供養の六体地蔵は悲運に倒れた一領具足の痛恨をなぐさめるかのようにたっている。

慶長5年12月5日一揆平定。この日と同じ潮騒はいまも耳に入る。吹く潮風も古松葉をひとつ二つと落として静かに過ぎていく。

東吉野村エッセイ⑧

高知県津野町との交流

奈良県東吉野村教育委員会
教育長
峠 隆司

盟約書（昭和56年4月18日）

「奈良県東吉野村と高知県津野町は、維新の英傑吉村虎太郎先生の誕生の地という歴史的なつながりがあり、また、その地形や産業等多くの共通点を持っている。

今後両町村の有効の絆を固め大いに産業文化の振興・発展をはかるため茲に姉妹町の盟約を締結する。」

昭和52年から、東津野中学校2年生の東吉野村への修学旅行が始まり、途中中断されていたが、平成12・13年の夏休みに1年生が東吉野村に来村、平成15年から2年生による天誅組墓参の修学旅行が再開され阪本元教育長が16年間ほど墓参の案内をされて昨年まで続いてきたが、その修学旅行も平成27年度で最後となった。

平成26年7月30日、東吉野小学校の児童が津野町を訪れることになり、東吉野村津野町と児童の交流体験学習が始まる。

平成27年度は次の交流等を実施した。6月4日、吉村虎太郎邸落成記念式典・祝賀会に村長・議会議員・教育長他が出席。6月19・20日、津野町「天狗荘」に於いて東吉野村・梼原町・津野町の初めての教育委員合同交流会を開催。

11月、津野町から民舞グループ及び津野町婦人会員が来村。吉村虎太郎先生の墓前舞踊を奉納された。

平成28年、本年度も東吉野小学校5・6年生が津野町を訪れ、津野町中央小学校5・6年生との交流会を行った。

これからも児童相互の交流活動をはじめ歴史的なつながりを大切に、様々な交流を進めていきたい。

吉村虎太郎邸で話を聞く子ども達

『東吉野村と津野町との交流会』
東吉野小学校「学校だより」より

昨年7月26日(火)～28日(木)の3日間高知県津野町へ5・6年生が交流学習に行ってきました。津野町とは天誅組の吉村虎太郎とのつながりで姉妹都市関係にあります。津野町は、東吉野村と同じように山があり清流があり、鮎が泳ぐよく似た環境です。

交流相手は、津野町立中央小学校の児童（6年生12名）です。本校には、他校の児童と出会っていろいろな刺激をもらってほしい、初めて出会う児童とでも物怖じすることなく相手の気持ちを理解し、楽しく接してほしいとの思いがあります。

中央小学校では、玄関で児童や先生方の歓迎を受け、少し緊張気味だったようです。その後、お互いの学校の様子をスクリーンに映しながら紹介し合いました。続いてゲームをする中で会話も増え、その後の活動であるプール遊びやお弁当作り・天誅組に関する学習会など常に仲よく活動し、素晴らしい交流が出来ました。

天誅組義挙から150年以上たった今、そのゆかりの地で児童達は運命的な出会いを果たし、両校の友好の絆が更に深まりました。

『桂浜・浦戸　碑めぐり』③

大土佐の桂浜を望む「吉井勇歌碑」

第二の故郷、高知を懐かしんで

桂浜の龍馬像背後の松林の中に、歌人吉井勇の歌碑が太平洋を望むように建っている。吉井勇（1886～1960）は、東京生まれの歌人で大正期の流行歌〝いのち短し恋せよ乙女〟のフレーズで有名な「ゴンドラの唄」の作詞でよく知られている人物だ。

吉井勇歌碑

昭和32年秋に建立されたこの歌碑は、真四角で文字がとても薄く細く刻まれ、その足元には松の根が地面から顔を出すほど大きく張り巡らされている。「大土佐の海を見んとてうつらうつら桂の浜に我は来にけり」、これはその名の通り桂浜を訪れて詠んだ歌である。全国各地を旅したことから漂泊の歌人とも呼ばれた勇が初めて高知を訪れたのは昭和6年5月の事。その後、昭和9年には猪野々（香北町）に居を構え、約3年間過ごし、昭和12年には高知市に移っている。高知を第二の故郷として懐かしんだ勇の歌碑は、ここ桂浜だけでなく、高知県下は8ヵ所に渡り建立されている。

ようこそ桂浜への吉井の説明文

また、長崎市玉園町の聖福寺にある〝じゃがたらお春の碑〟にも勇の歌が刻まれている。聖福寺とは、慶応3年（1867）5月22日〝いろは丸事件〟の談判が行われ土佐藩政・後藤象二郎と紀州藩勘定奉行・茂田一次郎とのトップ会談の舞台となった場所である。

「或日の龍馬」

実は勇は、龍馬とも関わりのある人物である。勇の祖父である薩摩藩士の吉井幸輔は、慶応2年1月、寺田屋で負傷した龍馬を、薩摩藩邸に避難させて介抱し、お龍を連れた新婚旅行でも、息子の幸蔵（勇の父）に案内役をさせている。勇は幸蔵から龍馬の話を聞いて、父と龍馬の思い出話を「或日の龍馬」として残している。この話から、龍馬や龍馬の故郷土佐に親近感を感じ、きっと興味を持っていたはずだ。

また、昭和8年の不良華族事件により傷心しきっていた勇が、高知を気に入り隠棲の地として選んだ理由には、もしかしたら龍馬が関係していたのかもしれない。

碑のそばに立つ案内板には、高知の美しい海と空を眺め、心を惹かれたことが書かれている。　**中村昌代・小島千穂**

吉井幸輔（友実）

文政11年（1828）～明治24年（1891）

薩摩藩士の家に生まれ、安政3年（1856）には、大坂藩邸の留守居役となり、諸藩の志士と交流を深める。誠忠組の一人として大久保利通らと国事に奔走した。西郷隆盛とも親しく、島流しにあった西郷を迎えに行った一人でもある。

慶応3年（1867）には、土佐藩の板垣退助や中岡慎太郎らと薩土密約を交わし、武力討幕の準備に加わったり、12月には、岩倉具視や大久保・西郷と共に王政復古の協議にも加わったりした。その後、鳥羽伏見の戦いでは、薩摩藩兵を指揮し、戊辰戦争でも東北各地を転戦した。

明治政府では、民部小輔や工部大輔、宮内大輔などを歴任。枢密顧問官も務め、憲法草案審議に参画した。質実重厚な人柄で、明治天皇からの信頼も厚かった。

龍馬暗殺1ヶ月前の慶応3年（1867）10月18日には、龍馬に身の危険が迫っていることを知らせ、土佐藩邸に入れないなら薩摩藩邸に早々に入りなさい、と勧めてくれている。龍馬は、土佐藩邸に入ることができないのに、薩摩藩邸に入るのは嫌みになると考え、どちらの藩邸にも入らず、1ヶ月後に暗殺されてしまった。龍馬にとっては信頼できる友人の一人だったと考えられる。　**三浦　夏樹**

飛騨の紙面にスマホをかざして動画を見よう！　視聴方法は簡単！
① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し ▶ マークのついた写真にスマホをかざす
※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2017年3月31日まで閲覧可能です。

拝啓 龍馬殿

平成28年9月21日～12月20日

55通

「力をかしてください」

僕はあなたにあこがれています。僕は人目を気にしてしまう。その人達が、周りの人々が自分の事をどう思っているのかが不安で、周りの目を全て気にしないで生きていきたいと思い、その努力をしています。だからどうか力をかしてください。僕もあなたのように信念を貫けるすばらしい人になりたいです。何事もイライラしないで、いつも元気で笑顔で、悩まない落ち込まない、何事にもまっすぐで、人目を気にしなかった龍馬さんのように、僕はなりたいです。僕の将来の夢は楽器を作る人になりたいです。頑張って勉強して、体も鍛えて、いろんなアイデアがたくさんうかぶように頑張ります。どうか力をかしてください。よろしくお願い致します。

（9月22日　福岡　M・I　14歳　男性）

「幕末を学ぶ」

前回ここを訪れてから、けんめいに幕末の様子を学ぶようになりました。今とつながっている時代に、今の日本を作ってくれた方々に尊敬の気持ちを込めて。活字や写真、手紙の数々がとても興味深く。また来ます。

（9月23日　茨城　Y・K　48歳　男性）

「龍馬の魅力とは」

娘が刀剣女子となり、日野や名古屋、そして高知へひとりで旅するようになりました。龍馬殿の足跡を追いかけています。そんな貴方様の魅力はなんなのだろうと日本史にうとい私がここまで来てしまいました。ほとんど人生初、貴方のことを深く知ることになり、来て良かったと思っております。この海を見て遠く広い世界へと思いをはせた貴方様の心を体に感じ良かったと思っています。歴史の先生にもたまたま会うことができてうれしかったです。貴方様の魔法かもしれませんね。

（9月24日　東京　M・Y　女性）

「信念をもって前進」

7年ぶりの桂浜、そして龍馬さんに会いました。この7年色々あり、長女は大学を卒業し念願の中学の教員に、長男は母と同じ看護の道でいま大4、次男竜馬は自分の得意な科学の勉強で大2になっています。私も公務員を早期退職し、労働組合の役員になってしまいました。信念をもって前進していきたいです。妻も50で大学生になり毎日勉強に奮闘しています。明日をいつも楽しく送れるよう、日々の鍛錬も大事です。健康管理をしっかりし、心のバランスも保ち、人の役に立てるよう引き続き努力していきます。又会える日、会いに来れる日を楽しみにしています。

（10月8日　長野　N・Y　49歳　男性）

「世界の広さを実感」

初めて土佐に来ました。東京で生まれ育った私は、ここから見える海を見て初めて世界の広さを実感したような気がします。この広く世界に通じる海を見て、世界を将来を考えた龍馬殿。東京の高層ビルに切り取られた狭い空しか知らない人たちが、龍馬のように先見の明や広い心を持てないのはあたりまえのような気がしました。

（10月29日　東京　22歳　女性）

「運命」

高校生の頃「竜馬がゆく」を読み、いたく感動してしまい、それから龍馬に夢中になってしまいました。思わず飼い犬の名を「龍馬」にしてしまったほどです。東京生まれ東京育ちの私は、ずーっと高知に行くのが夢でした。そして…、大学で出会った人がなんと高知出身で、私はお嫁にくることになったのです。犬の「龍馬」を連れて。あれから19年。今ではすっかり私も高知の「はちきん」です。犬の「龍馬」は天国に行ってしまいましたが、今は「弥太郎」という愛犬がいます。あなたに出会うことは私の運命だったのかもしれません。今でも大好きです！幸せな人生をありがとう！

（11月3日　高知　Y・Y　49歳　女性）

「パワースポット」

龍馬さん　またもんて来たがぜよ！ここは私のパワースポット！たんとパワーが蓄ったけん。ほいたらまたグッドバイじゃ！

（11月13日　岡山　R・F　58歳　男性）

「あこがれの存在」

私が龍馬さんと出会ったのは今から12年前の小学校6年生の時です。龍馬さんの高い志、器、価値観、生き方、全てにおいて私のあこがれの存在となりました。あれから12年、久しぶりに会いに来ました。龍馬さんと縁のある下関の大学へ4年間通い、やっぱり龍馬さ

今、この時代だから

―みんなで手をつなぐことの意味

2016年11月13日（日）、第5回目となる「レッツゴー！ハンドインハンド」を開催、目標の200名を大きく上回る350名の参加者が握手でつながった。

今年はこれまでの4回とは状況が大きく違っていた。新館建設工事のため駐車場がない。館内も何かと慌ただしく、今年の開催は無理ではないかという声もあったが、毎年楽しみに参加してくださる方もいるこのイベントを、規模を縮小して開催することが決定した。

様々な案を検討し、やはり〝握手でつながる〟というスタイルはそのままに、シェイクハンド龍馬像を起点・終点として、龍馬記念館の館内を巡るルートでつながることになった。開館から25年という節目の年を迎え、新しく生まれ変わるその前に、今の龍馬記念館を皆さんの目に焼き付けてもらいたい、そんな思いもあった。

つながるために必要な参加者は200名。これまでの参加者に声をかけたり、テレビ・ラジオ・新聞など様々なメディアで参加を呼び掛けたが、本番10日前の時点で集まっていた参加者は150人。何としてでも成功させなければと焦る気持

レッツゴー！ハンドインハンド

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード

② アプリを起動し ▶ マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。

※本コンテンツは2017年3月31日まで閲覧可能です。

んが大好きで、卒業論文のテーマも龍馬さんに関することでした。離れていても、やっぱり私の心の中には龍馬さんへの想いが残っていたのかもしれません。高知に戻ってきて約2年。今の仕事で本当にいいのかと悩んでいましたが、龍馬さんの熱い志、想いを改めて想い起こすことができて、本当に自分を見つめ直すきっかけになりました。ありがとうございます。これからも龍馬さんを尊敬し、あなたを目指して頑張ります。

（11月13日　高知　H・A　24歳　女性）

「龍馬のように」

現在、私は20歳になり、今後の生き方や自分自身について多くの悩みを抱えています。あなたは様々な人の意見を取り入れ、それだけでなくそれらを合わせた自分だけの世界観を持っておられます。そのようなあなたに会うことで何かを自分もつかめるのではないかと感じ、あなたに会いにやってきました。ここを訪れ、あなたの雄大さや自由さを感じることができ、とても幸せです。あなたのように自由で様々な考え方を持ち、行動力のある生き方をしたいと改めて感じさせられました。ありがとう。

（11月16日　20歳　男性）

「命日に」

今日の太平洋は静かで、ずっと沖まで見渡せます。あなたの命日に来ようと思っていましたが、5日遅れました。今の日本を空から見てどう思っていますか？満足でしょうか？それとももう一度せんたくした方がいい？少しでもあなたが、いやあなた方が理想とした日本になるように、私なりにがんばろうと改めて力をもらいました。この平和と日本らしさ、自然の美しさ、これからも空から見守ってくださいね。ではみな様によろしく。次の機会にまたお便りします。

（11月20日　香川　Y・O　57歳　女性）

「物凄い衝撃」

「竜馬がゆく」を40代で読んだときは物凄い衝撃を受けました。もっと若い時に読んでいたら自分自身、生き方が変わっていたかもしれないとショックでした。新しい世の中を作ろうとしていたのに、残念にも暗殺で亡くなり無念でなりません。もし生きていたなら世の中は変わっていたと思います。今回、仕事で高知に来ることが出来、又、記念館に来ることが出来、大変うれしく思います。本当に有り難うございました。

（11月27日　埼玉　Y・I　64歳　男性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

拝啓龍馬殿は開館当初から設置されているコーナーで、これまでに16700通を超えるメッセージが寄せられています。喜びや感謝を伝えるもの、現代の世への怒りを訴えるもの、悩み事を相談するものなど、その内容は様々です。私が飛騨の拝啓龍馬殿ページを担当させていただくようになって早10年。皆さんのメッセージに驚いたり、共感したり、ほっこりあたたかい気持ちになったり、そして、いつも前を向いて進む勇気をもらっています。

素敵なメッセージがたくさんの拝啓龍馬殿からは2冊の本がうまれています。

2008年7月発行の『ほいたら待ちゆうき 龍馬』は、1991～2006年の間に寄せられた12000通の中から1500通を掲載した読み応えのある一冊です。年ごとにまとめており、その年の社会的な出来事も掲載しているので、その時代を思い出しながら読むととても懐かしい気持ちになります。ふと手に取り偶然開いたページのメッセージが心に沁みることも。この本は一気に読むのではなく、気が向いたときに手に取ってぱらぱらとページをめくっていただきたいそんな一冊です。

もうひとつは2011年10月発行の『龍馬さんへのラブレター』。こちらは2007～2011年の間に寄せられたメッセージから300通を掲載。ソフトバンク社長の孫正義さんをはじめ17名の龍馬ファンの著名人から龍馬への手紙も掲載しています。さらに特別付録として龍馬が乙女姉さんに宛てた手紙10通を集録した豪華な一冊です。乙女姉さん宛ての龍馬の手紙には、あの激動の時代を駆け抜けた“龍馬の哲学”がよく表れています。来館者のメッセージと龍馬の手紙、両方から現代を生き抜くヒントをもらえる一冊です。

『ほいたら待ちゆうき龍馬』『龍馬さんへのラブレター』は龍馬記念館の通信販売でもお求めいただけます。まだご覧になったことのない方はぜひ手に取ってみてください。　尾崎　由紀

ちをおさえ、とにかくコツコツと参加を呼び掛け続けた。その中で何度か受けた質問がある。「どうして手をつなぐのですか」。

5年前、森健志郎前館長の発案でこのイベントは始まった。シェイクハンド龍馬像の1歳の誕生日を祝うイベントとして桂浜の龍馬像との間540mを参加者の握手でつなぐというもので、タイトルの「ハンドインハンド」は「手に手をとって」という意味だ。参加者の手がつながった瞬間に何かをしようということで、龍馬の「船中八策」にちなんで考えた「龍馬に誓う・現代こころ八策」を皆で読み上げることになった。第1回目は事前に700名の申込があり、当日は900人を超える参加者が集まり大成功をおさめた。900人の手がつながった瞬間、桂浜一帯があたたかい空気に包まれた。あの場にいた人にしか分からない不思議な感覚だった。「このイベントは面白い」そう思ったが、本当の意味はまだ理解できていなかったように思う。

そして迎えた今年の「レッツゴー！ハンドインハンド」本番。

10分前のリハーサル。ちゃんとつながっているか、館内を確認するため走った。外スロープは参加者がずらりと並んでいる。大丈夫だ。続いて2階展示室に入る。見渡すかぎり参加者で埋め尽くされていた。蛇行して並んでいるところもある。こんなに多くの方が集まってくださるとは、正直予想していなかった。その中には、森前館長のご家族や、現代龍馬学会の会員さん、記念館出入りの業者さんの姿も。いつも記念館を支えてくださる皆さんのお顔を見た瞬間感極まるものがあったがぐっとこらえた。

8時50分。ハンドインハンドが完成し、参加者350名で「龍馬に誓う・現代こころ八策」を唱和。参加者の笑顔あふれる中、イベントは無事終了した。

ホッとすると同時に思った。こんなに朝早くから、こんなにたくさんの方が、駐車場もない中で、このイベントに参加するために集まってくれた。参加する理由は人それぞれだけど、同じ目的のために集い、皆が力を合わせることでイベントを成功へと導いてくれた。人と人のつながりが希薄になってきている今だからこそ、人と人が集まることで不可能と思うこともやり遂げられる、そのことを証明しているように感じた。

「今だからこそ、みんなで手をつなぐ。」5回目にしてやっと本当の意味が見えた気がする。

イベントにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

尾崎　由紀

龍馬に誓う・現代こころ八策

1、家族を大切にしよう
2、お年寄り、先生を敬おう
3、友だちと仲良くしよう
4、思いやりの心を持とう
5、正々堂々と歩もう
6、志は高く持とう
7、勇気を持って行動しよう
8、レッツゴー！ハンドインハンド！
（手をつないで前へ進もう）

◆海の見える・ぎゃらりい◆

岩本和子「風と大地と」

山沖春蘭「ふるさとの海」

■「海の見える・ぎゃらりい 11年間の軌跡」展 開催！

会期:1月11日～3月31日

今回第115回目を迎える“海の見える・ぎゃらりい”の開催も丸11年を迎えた。2005年11月5日、記念館中2階の現在「談話室海窓」になっている場所からスタートした。オープニングは「国吉晶子 油彩画」展であり、当時『飛騰』第55号に国吉さんは「“海の見える・ぎゃらりい”は、その名前が即座に決まったといわれるほど、景観のすばらしい場所です」という書き出しで原稿を載せている。その通り、作品から目を移すと直ぐに海が望めるぎゃらりいは、日本全国さほどないと思う。

開設の目的は、県内作家の方々に作品を発表して頂き、その作品を県外からの入館者に鑑賞してもらいたいのと、館にとってそれまで疎遠だった地元入館者と龍馬理解者の増加が狙いだった。

私は第11回目から担当している。11年の間にぎゃらりいも中2階から現在の2階南側へ拡張し、夕顔の船室が出来、展示パネルもリニューアルされ、少しづつ様変わりはした。とはいえ、全てが手作り感あふれる設えのぎゃらりいに変わりはない。この空間に、様々な作家たちによる龍馬の世界をイメージした作品が展示された。その繋がりは、本当に“龍馬”の精神と魅力的な作品を通して広がり続けている。

「11年間の軌跡」展では、今日まで大切に育んで来た作家の方たちに、作品とメッセージをお願いした。県内・外の作家27名から思い思いの作品が届いた。心が込められたメッセージには“海の見える・ぎゃらりい”を開設した森前館長との思い出も多く書かれており、坂本龍馬記念館にあるぎゃらりいとしていかに思いを寄せてくださっているかが深く伝わって来た。

これらの作品と共にぎゃらりいの変遷を現した年表と展示写真、また「幕末写真館」展をきっかけに始まった「幕末の志士人気ベスト10」の結果発表など、走り続けて来た11年間を出来る限りお見せしたいと思う。作家の作品は前半・後半に分けて展示をし、3月31日をもってフィナーレとなる。

そして、平成30年には新たな装いで再スタートをする“海の見える・ぎゃらりい”の新空間へお越しください。

中村　昌代

岩崎勇代表「龍馬ゆかりの写俳展」

■ 新館建設に向けて　工事関係者が安全祈念

昨年10月27日、既存館西側の駐車場において、新館増築及び既存館改修工事安全祈願祭が執り行われました。この式には、記念館の高松館長が出席し、県副知事ほか県・高知市議会関係者、地元関係者、工事関係者ら約40名が出席しました。新館増築工事がスタートし、本年４月から現施設が休館に入り改修工事も開始されます。来年12月の完成、平成30年春のグランドオープンを無事迎えることができるよう祈念しました。

岡林孝太朗

起工式の様子

既存館西側で着々と進む工事風景

入　館　状　況

2016年12月20日現在（開館以来9,124日）

◆総入館者数	3,909,918人
◆最多入館	(2010年5月2日) 6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため) 8人
◆2016年度最多入館	(2016年5月4日) 2,098人
◆2016年度最少入館	(2016年12月13日) 50人

編　集　後　記

龍馬没後150年の年となった。今から150年前の慶応3年は、海援隊発足、いろは丸事件、“船中八策”の起草、イカルス号事件、土佐への帰郷など、大政奉還に向けた龍馬の動きは慌ただしい。

そんな年の初め、記念館の周辺も慌ただしい。昨秋から記念館周辺の景色は大きく変わり、新館建設に向けた工事も急ピッチとなっている。既存館最後の企画展、県外での巡回展スタート、4月からの休館に向けた引越や事務所の整備など息つく暇がない。

さて、おかげさまで『飛騰』も100号発刊を迎えた。1号1号、一日一日の積み重ねの賜物である。多くの顔、多くの場面、多くの思い。そうした時間の上に、また一歩一歩の努力を重ねて行こう。（ゆ）

館だより“飛　騰”第100号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2017(平成29)年1月1日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般 500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者１名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

休館のご案内

新館増築・既存館改修工事のため、平成29年4月から約1年間全面休館いたします。グランドオープンは平成30年春を予定しています。（工事に伴いバス駐車場はご利用できません。普通車の方は臨時駐車場のご利用となります。大変ご不便をおかけいたしますがよろしくお願いいたします）なお、休館中の仮事務所は隣接の「桂浜荘」に設置します。

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、120円切手４枚をお送りください

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

九反田・開成館をもっと知ろう

「近代日本の礎を築いた開成館の役割とその検証」

現代龍馬学会会員
「九反田開成館をもっと知ろう会」会長
井倉 俊一郎

「開成」の意味は、ヒトモノを開く、人の知識を向上させ事業を興す。つまり今でいう産業振興政策であり、開成館は日本初の商社機能を持った組織でありました。

開成館の立地場所は「土佐藩政録」によりますと城下ニテ水ニ近キ土地ヲ選定ス即ち高知城東九反田(現在の東九反田公園)に相シとあります。

なぜこの場所かと推測しますに、この時代最大の運搬機能をもつ船舶が行き来できる場所、そして物流拠点に近い場所であったことかと考えられます。

検証1 鎖国日本に海外事情を初めて紹介した日本人中浜万次郎からの学び

嘉永4年(1851年)、ジョン万次郎こと中浜万次郎がアメリカから鎖国日本に帰国。ジョン万次郎が到着した琉球を統治している薩摩藩主島津斉彬は直接ジョン万次郎を呼び寄せアメリカ事情を詳しく聞いている。

その後ジョン万次郎は嘉永5年(1852年)土佐藩へ、高知城下で2か月余りアメリカ事情、海外情勢を克明に説明する。そしてジョン万次郎から中浜万次郎として土佐藩の士分に取り立てられ「教授館」にて後藤象二郎、岩崎弥太郎らを教えている。

坂本龍馬は安政元年(1854年)「漂巽紀略」を書いた河田小龍から直に中浜万次郎が体験したアメリカ事情、海外情勢を聞いている。

そして山内容堂は、開成館の組織についてすでに幕臣であった中浜万次郎に相談している。

「開成館」古写真

海外事情を中浜万次郎から直接、間接的に学び海外の脅威を感じた山内容堂、後藤象二郎、坂本龍馬、岩崎弥太郎がこの開成館のもとで海外との大仕事を成しえていくのでありました。

検証2 薩摩、長州、土佐の海外列強諸国に対抗する動き

嘉永6年(1853年)アメリカからペリー艦隊来航。翌年日米和親条約が締結され、安政5年(1858年)には日米修好通商条約が結ばれて鎖国が解かれ、海外との貿易が許されることとなる。

文久3年(1863年)から元治1年(1864年)に起こった欧米との衝突、薩英戦争、下関戦争、馬関戦争を境に薩摩長州は近代化路線へとかじを切る。

安政3年(1856年)長州藩が大砲鋳造のための反射炉を萩に建設する。

慶応元年(1865年)薩摩藩がアジア初の近代様式工場群「集成館」を建設する。そして我が土佐藩も慶応2年(1866年)海外との貿易を見据えた「開成館」を設立する。

西南の端にある見識ある外様大名であった薩摩、長州、土佐三藩は海外情報のことの重要性が理解できた。しかしこの混沌とした時代、藩内では連綿と文武両道に励んでいた若い下級武士の底力が真綿に水のごとく全てを吸収し、ある時はガソリンを注ぐごとく発火爆発していった。

特に土佐では藩論がまとめられずにいた。藩では十分でも身分制度の厳しい土佐藩では藩論がまとめられずにいた。

検証3 開成館での仕事と大政奉還までの軌跡

慶応2年(1866年)1月21日。坂本龍馬、中岡慎太郎の仲介で薩長同盟の密約がなされたとの情報は土佐藩参政後藤象二郎に伝わっていた。薩長の動きは討幕に進む情勢ではあるが土佐藩としては中立を維持し、富国強兵の策で軍事力を蓄えることを後藤象二郎は山内容堂に進言する。

この時期既に殖産興業推進のための開成館設立構想が出来上がっていた。

慶応2年(1866年)2月土佐藩主山内容堂の命で「開成館」が建設される。その最高責任者として参政後藤象二郎が筆頭奉行に任命される。

薩摩藩の「集成館」が工場群であるとしたら、「開成館」は産業振興を推進する12局の部局を持った総合商社であった、その中でも特に重要な部局は海外との貿易を行う貨殖局。ここの役割は高知県産の特産品(樟脳、鯨油、和紙、鰹節など)を長崎経由にて海外に売り込みその資金で船舶、武器を購入する藩の地産外商部局であった。

土佐藩主山内容堂の考え、参政後藤象二郎の考えとも島国日本その中でも前が大海原、後ろは険しいし四国山脈に位置する土佐藩の活路を生み出すには、海路を利用して海外との貿易を図り、南洋諸島を開拓することにあった。

この考え方は慶応3年1月後藤象二郎が開成館より長崎出張時、清風亭で坂本龍馬との初めて会談で両者とも目指すところは同じと確信し、意気投合した話の内容であったと推測する。

慶応3年2月坂本龍馬率いる結社「亀山社中」は「海援隊」として改め土佐藩開成館長崎出張所(土佐商会)所属の組織となる。

開成館長崎出張所貨殖局に派遣されていた岩崎弥太郎も度々坂本龍馬と席を同じくし、坂本龍馬から諸藩の動きそして彼の壮大な海外との貿易ビジョンを聞いたことと推測する。

中浜万次郎が海外事情を教え、坂本龍馬が藩外との交渉を一手に引き受け、その情報を後藤象二郎がまとめ、山内容堂が決済する。そして雄藩に追い付け追い越せとばかり後藤象二郎が外国から買い込んだ船舶並びに武器の借入金の負債を貨殖局の主任岩崎弥太郎が後始末を付ける。

まさに幕末土佐偉人達の連係プレーが発揮された開成館時代であったと考える。

慶応3年6月後藤象二郎が上海で購入した「夕顔」の船中で坂本龍馬が起草した新国家体制の基本方針「船中八策」を基に作られた大政奉還の建白書を、山内容堂から幕府に提出され、日本歴史上の大転換(大政奉還)が慶応3年10月になされた。

この九反田開成館から派遣され、任命された後藤象二郎、中浜万次郎、岩崎弥太郎、坂本龍馬が大政奉還を成立させ、明治維新の道を切り開いたといっても過言ではないだろう。

来年の「志国高知幕末維新博」で幕末維新に大活躍した土佐偉人達の開成館での仕事役割をもっと大々的に全国へ発信するべきだと考えますが、皆さまいかがでしょう。

※訂正
飛躍98号(平成28年7月号)の学会紙面2ページ。「網屋喜行氏の発表内容中、「「がんきち」とルビを」とあるのは、「「げんきち」とルビを」の間違いでした。お詫びして訂正します。

も面白い 今が一番！

宮川 禎一 さん

関係者の間で"京都の宮川さん"と言えば、龍馬研究第一人者のこの人。
その宮川禎一さんは、昨年10月から京都国立博物館（京博）を皮切りに開催している特別展覧会「龍馬没後150年 坂本龍馬」（京博・読売新聞社等主催）の企画担当者である。京博での特別展は、44日間の開催期間中に9万8500人もの入館者で賑わった。
京博所蔵の龍馬資料（国指定重要文化財）をはじめ、龍馬の佩刀やパークス事件で斬り合った刀の展示など刀剣愛好家たちの話題にも上り、『龍馬の翔けた時代』（2005年）を上回る展示資料と入館者数を記録した。
また、この「飛騰」の中にある現代龍馬学会の連載エッセー「犬歩棒当記」（犬も歩けば棒に当たる記）ではあらゆる角度で龍馬を語っており、最近それを含めたものが『「霧島山登山図」は龍馬の絵か?―幕末維新史雑記帳』（教育評論社）として発刊された。
京都での特別展終了後、宮川さんは資料返却と次の長崎展の準備に追われていた。先月来高した宮川さんに高知県立歴史民俗資料館でインタビューした。

特別展覧会への思い

――京都展が終わったとはいえ、お忙しいですね。きょうは資料返却の最中にお邪魔してすみません。少しお時間をいただいてお話を伺います。早速ですが、特別展の手応えはいかがですか。

龍馬没後150年と言っていますが、149年目である今年（2016年）が重要なんですよ。来年（2017年）だと、龍馬ゆかりの年ですから、各地で龍馬資料を展示したいはずなので、ここまで多くの史料を集めることは難しいです。なにしろ、龍馬の手紙のほぼ半分、70通ほどの原資料を展示しましたからね。高知の関係者にもずいぶんお世話になりました。準備のために3年くらい通いました。

おかげさまで、11年前の特別展『龍馬が翔けた時代』の2倍近い方にご覧いただくことができました。この11年の間に龍馬研究は進んでいますから、そういった意味でもいいタイミングです。

――私も今回の京都展に2回出かけましたが、それでも見切れないほどの内容。人が多くて見られない資料もありましたものね。さすが国立博物館、いえ宮川さんだからこその展覧会でしょうね。展覧会開催の原動力になっているものは何ですか。

まあ、各地のご協力は大きいですね。龍馬記念館はじめ日ごろからのおつきあいがあるおかげで、気兼ねなく資料の相談ができるところはありがたい。

私は細かく計画的でないところもあるんですが、大きくはキチンといくんですよ（笑）。龍馬的というんでしょうか。

でも、根本には龍馬の良さを伝えようという強い思いが力になっています。

龍馬の手紙を読む愉しさ

――宮川さん言うところの〝龍馬の良さ〟とは何ですか。

龍馬はいいですねぇ。なんといっても手紙の表現が好きです。

大人になっても乳母の話をして、周囲に笑われている。宴会のときなんかにそんな人がいますよね。ちょっと自虐的な笑いを取って、それがまた愛情表現につながるっていうような。

例えば龍馬が姪の春猪に宛てた手紙のひとつ。年代が書かれておらず、もともとは慶応3年1月20日だと言われていたものですが、私は前年の1月20日、つまり薩長同盟が結ばれた前日のものだと発表しました。姪をかなりからかう内容になっています。お前の〝あばた顔〟を金平糖の鋳型に入れよとか、男という男が逃げ出すとか散々です。そうかと言えば、精出して長い人生を送れという。溜めてたストレスを姪に向かって吐き出し、解消しているかに思えます。

こんな心の機微をストレートにぶつける男があの時代にいますか。なかなかいないよね。この人間性が面白く、愛すべき人だと思うのです。

――手紙を読み込んでいる宮川さんならではのコメントですね。そうそう、龍馬の手紙に最も多く出てくるのは「はからずも」という言葉だとか。

そう。「はからずも」ですよ。我々の人生は計画的に行くわけでなく、予想通りにはならない。もちろん悪いことだけでなく良いこともそうですよ。

私もまさか坂本龍馬さんとこんなおつき合いをするようになるとは、子どもの頃には思ってもいませんでしたからね。

考古学から龍馬研究へ

――子どもの頃？宮川さんはどんな子どもだったのか興味がありますね。

私は大分県宇佐市安心院（あじむ）町で生まれました。小学生の頃は野山を歩き回って土器や石器を拾っていましたよ。父は中学校

話題人インタビュー 龍馬も考古

京都国立博物館上席研究員

長で理科が専門。兄も理系でしたが、私だけが文系です。小学校5年生のときに読んだエジプトの『ツタンカーメン王の秘密』をきっかけに歴史をやろうと思いました。中学校は陸上部で、2年生のとき100mハードルで県大会2位の記録もあります。エヘン（笑）。

中津南高校時代は郷土研究部の部長で、近くの山で弥生土器を採取していました。京都へ行けば、古刹もあって歴史を学べると京都大学へ進学して考古学を専攻したのです。卒業後は兵庫県西宮市にある辰馬（たつうま）考古資料館の学芸員として10年間韓国など東アジアの陶質土器などの研究をし、1995年から京都国立博物館で勤務しています。

――なるほど。考古学専攻の過程がよく分かりました。その宮川さんがなぜ龍馬研究へ向かうのですか。

はからずも、ですな（笑）。

京博に就職して、たまたま龍馬資料の担当となったのですね。それまでは『竜馬がゆく』『おーい！竜馬』を読んでいた程度でした。

京都国立博物館本館前で

考古というのは文字のない時代の研究ですが、龍馬研究は文章によって人間心理に向かうような研究で、手法がまったく異なります。

担当者になって、龍馬が暗殺時に居た「近江屋」四代目の井口新助さん（故人）から同家に伝わるお話を聞いたり、新しい龍馬の手紙に接したりするようになり、龍馬に対する興味がわいてきました。

また、昭和初期に坂本家や井口家から寄贈された龍馬資料は、以前は今ほど注目されていませんでした。その龍馬資料を、湯山賢一先生（現在、奈良国立博物館長）のアドバイスもあって文化庁に申請し、1999（平成11）年に国の重要文化財に指定されたことなども、今につながっているのでしょうね。

龍馬も、人生もひと言では語れない

――20年の歳月を龍馬とつき合っている宮川さんにとって、龍馬の手紙と対話して聞こえてくる声、感じるものって何でしょうか。

龍馬の奥底にあるウェット（情的）な部分かな。

龍馬には、漢詩のような定型化したものにはない「あわれ」や「かなし」といった感性や情緒があります。また、主語と述語がない〝牛のよだれ〟のように続く日本語特有の文体が面白い。言文一致ではない候文（そうろうぶん）の妙味がありますね。現代語訳をしていて詰まることもありますが、日本語の良さを感じます。型にはまらない文章の流れ、ハッとした、ふと思った。そんな言葉に「なるほど」と思うわけです。

――私も龍馬の手紙は文学的にも優れていると思います。龍馬をひと言で語れないように宮川さん自身もどこかとらえようがない（笑）。龍馬と似ているのかな。

人の人生なんてひと言では語れませんよ。人間とは何か。自分がどんな人か。それは遺跡の発掘と同じでしょうな（笑）。

初めに言ったように、私は理系の父と兄がいる次男坊で、龍馬も次男。龍馬の手紙にもあるように、弟は「ハイハイ」というように人の話を真面目に聞いていない部分がある。でもいい加減ではありません。

故郷大分に「げってん」という方言があって、ちょっとへそ曲がりな人のことを言います。京都生活が長くても、そんな県民気質は消えないと思いますね。

――話は尽きませんが、宮川さんにとって龍馬研究と考古学とどちらが面白いのか。また、一番良かった時はいつなのでしょう。

龍馬も考古もどちらも面白い。これからも一生つき合っていきますよ。そして、波乗りと同じで〝今〟が一番いい時ですね。

Profile

宮川 禎一（みやかわ・ていいち）

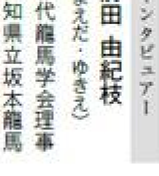
京都国立博物館上席研究員、列品管理室長兼考古室長。

1959年大分県宇佐市生まれ、京都市在住。京都大学大学院文学研究科修士修了（考古学専攻）。

財団法人辰馬考古資料館学芸員を経て、京都国立博物館考古室員から現職へ。

著書『龍馬を読む愉しさ』（臨川書店）、『全書簡現代語訳・坂本龍馬からの手紙』（教育評論社）ほか。

特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」は現在長崎展開催中。その後東京、静岡へ。



インタビュアー

前田 由紀枝（まえだ・ゆきえ）

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬記念館学芸課長

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（二十八）―

「ひねりが効いている」

宮川　禎一

坂本龍馬の手紙表現で面白いのは時々自虐ネタが見られることだ。慶応元年9月9日の池内蔵太家族へ宛てたもの（鴻池合資会社蔵）では自分の乳母のことについて「時々人に言い、またウバが出たと笑われております」との奇妙な表現が見られる。これは脱藩後、土佐人らとの宴席で故郷の話題になった時に「ところで俺の乳母って元気かなあ？」などと龍馬が突然言い出すので「30歳にもなってまだ乳母のオッパイが恋しいのか」「また龍馬が乳母の話をしているよ」などと皆にからかわれている、という意味だ。もちろん乳母への愛情・気遣いをこのようにひねった形で表現したものであり、笑わせながらもその伝えたい意図は確実に乳母本人へ伝わったはずだ（池内蔵太の家族は坂本家と懇意なので）。龍馬の表現のうまいところである。

乙女姉さんに対しては「乙女姉さんの名前はこの頃全国的に有名ですよ。龍馬より強いという評判なり」（慶応元年9月9日・乙女・おやべ宛・京博蔵）というものもある。龍馬が有名になるにつれ諸藩の人間が土佐人に「坂本龍馬さんは北辰一刀流の達人だそうですな」などというと「いやいや土佐には龍馬さんよりもっと剣の強い人がおりますぞ」「ええっ？それはいったい誰ですか」「龍馬さんに剣を教えた乙女さんというお姉さんじゃ」などという笑い話である。これもかなりひねりが効いている。冗談ではあるが乙女姉さんも悪い気はしなかったはずだ。

さて、京都国立博物館では平成28年秋に特別展覧会「没後150年　坂本龍馬」を開催させていただいた。入館者の合計は98,500人であった。読者の中にもわざわざ京都までお越しくださった方もいらっしゃるだろう。厚く御礼申し上げる。

来館者が10万人にわずかに届かなかったことを少し残念に思っているのだが、筆者なりの表現で言うならば「あと1,500人。10万人来てくれていたら『展覧会の良し悪しっていうのは入場者数の多い少ないじゃないよね』と言えたのに、と悔しがっています」である。この表現はすこしひねりすぎであろうか。

特別展覧会のチラシ

コラム・龍馬のこと

「時代が変わってもやっぱり“龍馬”」

現代龍馬学会理事　竹内　土佐郎

自から平等で平和な民主主義国家建設のために奔走し、新しい国づくりに道筋をつけ、その現実を見ることなく無念にも道半ばにして風となった龍馬。

私が、龍馬という名を知ったのは、小学校（5、6年生の時。昭和29年頃）である。

当時、どさ回り的に活動写真（映画）が我が村にやって来た。この活動写真の題目は忘れたが、龍馬に扮する坂東妻三郎、慎太郎に扮するのは誰だったか分からないが、近江屋で数人の刺客に襲われ惨殺された映画であった。

その後、明治2年生まれの祖父は、その映画は「坂本龍馬と中岡慎太郎が世直しのことについての話をしているところを襲われたのだ」と話してくれたことを覚えている。それに加えて「龍馬は、安田の高松順蔵さんのところへ度々来ていたようだ」ということも聞かされた。このようなことで子ども心に坂本龍馬という人物に親しみを覚えたものであった。

龍馬は、倒幕のため長州と薩摩の両藩を連合にとりつけ、土佐藩の参政後藤象二郎を動かし将軍に大政奉還へ向かわせる。諸藩の倒幕への勢いが増す中、幕府は四面楚歌の如くになりつつも龍馬の言動が疎ましく謀殺する。

龍馬は武力による争いを避け、身分差別のない自由で平等、平和な国家を目指すも叶わず逝ってしまう。

龍馬の自からを信じ、その信念による国家づくりのスピリットはいつまでも人の心の中に生き続け輝くことであろう。その証しは、全国に龍馬を敬慕し多くのファンが没後、150年も経った今も絶えることなく、坂本龍馬記念館に足を運んでくれているからである。

“話してみるかよ”

「ぼくらの平和活動『世界に平和の折り鶴を送ろうプロジェクト』」

高知市立一ツ橋小学校PTA会長　仁井田　恵子

私たち親子が平和を意識したのは2年前の「子ども・龍馬フォーラム」で、ひろみピーターソン先生の「サダコプロジェクト」の話を聞いてからです。その時は、自分たちがピースビルダー（平和を作る人）になるなんて思ってもいませんでした。

しかし、突然“その時”が来ました。それは、親子でパリ同時多発テロのニュースを見ていた時に、息子は怖くて悲しくて、「戦争が起こったらどうしよう。僕に何かできることはない？」と言います。私は「平和の折り鶴を作っては？」と提案しました。

すると息子は友達を誘い、校長先生に相談に行き、平和の折り鶴を世界に届ける「平和実行委員会」を立ち上げました。皆で1,244羽の鶴を折ってハワイに送ると、ひろみ先生はパールハーバーにあるアリゾナ記念館の来館者に配ってくれました。そのことで息子は、やってよかった。でも、もっと多くの人に鶴を送り平和を訴えたいと思ったのです。

しかし、昨年は声をかけても人が集まらず、「僕は独りぼっちや」「休み時間にしてもらうのが悪いき、もうえい」と孤独感と諦めの言葉を口にするようになりました。私は「一人でやっても意味がない。皆でやってこそ意味がある」と、エールを送り続けました。

すると最初は50羽だった鶴が延べ200人の友達の協力で1,400羽の鶴が出来上がったのです。そこで私たち家族は、6月にハワイに行って直接手渡しすることにしたのです。

息子は自分の言い出しに周りが必死に動いてくれたこと、優しさという気持ちの力と、仲間を信じることの大切さを知り、パールハーバーでは、言葉が通じなくても平和の気持ちは通じることを強く感じました。私は、子どもが未来へ向かうエールの引き出しを持っていてよかったとつくづく思いました。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL (088) 841-0001　FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp